

Title	ドゥルーズの習得論 超越論的経験論の生成と構造
Author(s)	山森, 裕毅
Citation	大阪大学, 2012, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/23498
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	山 森 裕 毅
博士の専攻分野の名称	博士(人間科学)
学位記番号	第 25303 号
学位授与年月日	平成24年3月22日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間科学研究科人間科学専攻
学位論文名	ドゥルーズの習得論 超越論的経験論の生成と構造
論文審査委員	(主査) 教授 檜垣 立哉 (副査) 教授 中山 康雄 准教授 村上 靖彦 立命館大学教授 小泉 義之

論文内容の要旨

本研究の目的は、二十世紀を代表するフランスの哲学者ジル・ドゥルーズの提示した「超越論的経験論」の内実を解明することである。超越論的経験論はドゥルーズ哲学の特徴を端的に言い表したものとして、これまで多くの研究者たちの間で研究されてきたが、それが具体的にどのような経験を指しているかを明確に提示した研究はほとんどなかった。本研究では、超越論的経験論は「習得する」という経験をモデルとしてしていると主張する。つまり、超越論的経験論は習得の構造を説明した理論であるといえる。本研究では、ドゥルーズの処女作である『経験論と主体性』（一九五三年）から超越論的経験論という用語がはじめて登場する『差異と反復』（一九六九）までの著作を辿りながら、習得の構造としての超越論的経験論の生成過程とその実際の構造を明らかにすることを目指す。超越論的経験論は『差異と反復』において、能力の超越的行使の理論として提示されているので、本研究はドゥルーズの能力論に着目し、その発展を追っていく。

本研究は二部構成を採る。第一部では、ドゥルーズが『差異と反復』で自身の哲学的主張を提示する以前に行っていた、哲学史家としてのモノグラフ制作の仕事を概観し、習得につながる議論を掘り起こしていく。超越論的経験論の生成過程を追う議論でもある。ドゥルーズの著したモノグラフのなかで、本研究では能力論の観点から、ヒューム論である『経験論と主体性』、『カントの批判哲学』、『ベルクソンの哲学』、『ブルーストとシーニュ』を扱う。

まず一章では、ヒューム哲学における想像力の能力についてのドゥルーズの見解を考察していく。ここで、ドゥルーズは想像力が能力として生成する過程を描きだしていく。それは結局、経験において与えられる所与から想像力の働きによって主体が構成されてくる体系を描くことになる。そこでは想像力が構成する時間論も登場する。また、所与から主体を構成する想像力の働きを「経験の超出」としてまとめている。

第二章のカント論では、この「経験の超出」の議論が引き継がれ、かつカント的な超越

論哲学における能力論の構図が取り上げられ、分析される。ドゥルーズのカント論は、ドゥルーズによるただの教科書として見なされてきたが、ここで取り上げられた議論の多くがドゥルーズの思想に大きな影響を与えていることを確認する。とりわけ想像力・悟性・理性の三つの能力の連関という考え方は、『差異と反復』での感性・記憶・思考の連関という考え方に基礎を与えているといえる。ドゥルーズにおけるカント哲学の影響は、本研究のなかで機会があるごとに言及している。

続いて第三章と第四章を成すベルクソン論では、直観と記憶という能力について論じる。直観という概念においてドゥルーズが「経験の超出」をまたしても論じていることを確認する。こうして「経験の超出」という考えが、ドゥルーズのなかで通底した議論であり、かつ超越論的经验論の原型であると主張する。また、直観の議論が実在的で非人間的な経験の条件であるという議論の中身を考察する。そこでは可能的経験の条件を論じたカントや人間的経験の条件を論じたヒュームを批判しつつ、そのことでどのような経験をドゥルーズが論じようとしたのかを見る。また、記憶という能力が構成する時間の構造についても確認する。

第一部の最後である第五章はブルースト論を考察する。第一部において最も重要な章であり、本研究においていくつか重要な論点を提示する。ひとつはブルースト論においてはじめて習得が主題として登場する点であり、その内容を確認する。それはシーニュ（記号）概念と深く結びついており、シーニュを受け取り、それが巻き込んでいる本質を時間的に展開する仕方を学ぶことと要約できる。次いで、この習得が思考するという能力に関わるという点である。またシーニュが能力を非意志的に行使させるものであるという点も第二部の議論のために重要である。そして最も重要なのは、ブルースト論がドゥルーズのカント美学論を展開したものであり、カントが区別した感性論と美学をドゥルーズが統合しようとしていたという点である。このようにブルースト論を読むことで、ドゥルーズにおけるカントの影響力の大きさとカント批判の内実を公正に判断できるようになる。

第二部では、ドゥルーズの哲学的名著である『差異と反復』から超越論的经验論の構造を解明していく。あらかじめ述べておくと、本研究では超越論的经验論は能力の超越的行使という経験の理論であると主張する。習得が能力の超越的行使によって成立する仕方を第二部では押さえる。

まず第六章では、超越論的经验論に対置される通常の経験が、能力の超越的行使に対置される経験の使用とどのように関わり、どのような経験論を構成するかを確認する。それによって、超越論的经验論の射程を明らかにするための参照としたい。

第七章では、能力の超越的行使について論じていく。ここでは、モノグラフの仕事で論じられた能力論の研究がドゥルーズ自身の観点からどのように捉え直されたかを確認する。とりわけ重要な点は、ベルクソン論での所与とその混合物としての強度という概念配置がドゥルーズにおいて反転し、そのことで経験の超出という考え方が採られなくなり、超越論的经验論になることである。また、この強度概念がブルースト論のシーニュ概念と結びつき、ドゥルーズ独自の超越論的感性論が論じられる点も重要である。また、ドゥルーズ自身が解説している水泳の習得の事例を使って、能力論における習得の構造を考察する。

第八章では、思考や習得と関わる問題・問い・解の弁証法を解説する。それを通してドゥルーズ哲学における非本質主義や、プラグマティズム的な側面を紹介する。

第九章では、能力論の時間論的展開を考察する。これまでのドゥルーズ研究では時間論

に焦点が当たることが多かったが、本研究では時間論が能力論を基礎に置いていることを主張する。この観点から時間論が能力論を展開したものであると考えて、能力の時間的展開が習得という経験において担う役割について考察する。この考察を通して、能力が人間の主体に還元できないだけでなく、習得が人間に制限されない経験であることを論じていく。

最後に第十章では、能力論、問題論、時間論を踏まえたうえで、習得する自己論を考察する。ここでは、ドゥルーズによって独特に解釈し直されたコギト論の構造を解明していく。

全体を通して、超越論的经验論を習得の構造として提示できたと考える。

論文審査の結果の要旨

山森裕毅君の博士論文「ドゥルーズの習得論 超越論的经验論の生成と構造」は、20世紀フランスの哲学者であるジル・ドゥルーズの思考の形成を、とりわけ主著である『差異と反復』が書かれる以前の時期のヒューム論・カント論・ベルクソン論・ブルースト論を検討しながら、ドゥルーズが自身の哲学的な方法論の核心である「超越論的经验論」という方法論的概念を入念につくりあげてきた過程を辿り、さらにそれが『差異と反復』における「習得」という中心的事例に関連することを明示することで、ドゥルーズ哲学に対する読解のひとつの道を開いたものであるといえる。

山森論文の評価点はつぎのことにある。第一に、これまでドゥルーズの思考の成立を扱ってきた議論や論考は数多いが、山森論文はとりわけ「能力論」というテーマの設定を軸としながら、最終的にはパラドクスのな能力性の発動として示されるその主題が、ドゥルーズ自身が各哲学者のモノグラフを検討するなかで、さまざまな転換を経ながら獲得してきたことを明確にしたこと、第二に、そのなかでもいままでも傍流的な著作であるととらえられがちであった『ブルーストとシーニュ』を、能力論としてのドゥルーズのオリジナルな思考を獲得するための重要な著作として位置づけたこと、第三に、こうした超越論的经验論の位相を、抽象的な能力論的な位相にとどめず、「言語を習得する」あるいは「水泳を習う」という具体的な習得の過程の分析に適用し、その解明を試みたことにある。最後の論点を山森論文では、ドゥルーズのプロブレマティック主義・パースペクティブ主義・プラグマティック主義とまとめている。それにより、広く思想史の伝統のなかで、あるいはさまざまな人間科学的な探究に関与する議論のなかで、これらの議論がもつ位置づけについてもはっきりした提示をなしているといえる。

その意味で、本論考はきわめて手堅い方向性によって議論を進めながらも、これまでのドゥルーズ研究とは異なった視角から、『差異と反復』にいたるその哲学的方法論を明確にするとともに、とりわけシーニュ論や、能力論としての身体の問題そのものにも視界を開くものとなっており、ドゥルーズの60年代以降の著作、とりわけ実践性との関連へ新たな観点を導入するものであるといえる。またより広くいえば、こうしたテーマは、近年英米系の議論でみられるような、ドゥルーズを利用した教育学などへの展開がみこまれるものでもある。

申請者は論文中でも、邦語の文献はもとより、最新の仏語英語の文献や研究論文を丹念に読み込んでおり、また本論考の内容を含む学会査読論文が複数本ある。また日本でおこなわれたエラスムス・ムンドゥスの国際シンポジウムにおいて、本論校の一部のあたるもののフランス語で口頭発表をおこなっている。それゆえ十分な語学力、研究発表力はそなわっていると判断できる。

よって本論文は博士（人間科学）の学位論文として、十分価値があるものと認められる。